

動員室に勤務して

愛知県 富田 昇

昭和十七（一九四二）年二月十三日、教育召集で名古屋第三師団輜重兵第三連隊第二中隊に一カ月間入隊しました（中部十三部隊）。第一、第二中隊が馬で、第三中隊が自動車隊でした。馬部隊は一カ月で帰されましたから階級は二等兵のままでした。

私の家庭は父母と男ばかり四人兄弟で私は末弟です。長兄は陸軍工廠に勤め、次兄は応召中、三兄は航空隊に志願して入っていました。

私は学校を卒業してから叔父が勝川駅前で経営している洋服店で縫製の修業をしていましたので、兵隊にいても縫工の特業を受けました。

昭和十八年七月、充員召集が来て、一年半前の教育召集で入った同じ中部十三部隊の第三中隊に入りました。入る前に富田家に養子に入籍しました。

営庭で馬部隊の列に並んでいたら「令状に「輜補自」の印がある者がいるだろう」と呼ばれ、自分の令状を見たら正しく「輜補自」とあり、字の上に「縫工」と書いてありましたので別の列に移りました。

教育召集の時と違って今度は自動車隊である第三中隊に入りましたが、早速、縫工場要員として縫工場勤務を命ぜられました。ここでは戦地から送られてきた被服の修理が主な仕事でした。

また、私は洋服屋の事務もやっていたので縫工場の経理検査の準備の手伝いをして喜ばれました。後ほど師団司令部勤務になってからも、経理部の倉庫から襟布をもらっては上の人の襟布を新品に取り換えたりしたので点数が上がりました。

自動車隊の内務班は昼間ほとんどの者が勤務に出ており、勤務明けの者がわずかいるだけでしたが、新兵で営倉下番の兵隊がいました。

この者は三カ月の間に三回脱走して、その都度十日、二十日、三十日と計六十日間営倉に入っていた猛

者（モサ）でした。

入隊して二カ月にならない頃、准尉さんから「富田、明日から師団の動員室へ行け」と命ぜられました。

動員室は近くの名古屋城内にありましたが、星一つの二等兵が参謀中佐（主任）に申告するのが恐ろしく、今思い出しても足が震えて何を言ったのかおぼえておりません。

中隊からは私一人だけ派遣され、ほかに二人ばかり二等兵が来ました。仕事は庶務係の小林軍曹の手伝いで、主に書類の発送と受付でしたが、偉い人ばかりの中での二等兵でしたので皆から可愛がられました。

たまの休日外出で実家に帰る時、経理部から貰ったタバコを父に渡すと大変喜んでくれました。

動員室に勤務するようになってすぐに動員室の人事係の准尉さんが「富田、いつになったら一等兵になるんだ」「わかりません」「いつまでも二等兵じゃ困るんだ」といって中隊へ電話していました。

二、三日後の夜、内務班へ帰ると初年兵が「富田さ

ん、おめでとうございます」と昇級を知らせてくれました。

師団司令部参謀部動員室は人数四十人ほど、山下参謀少佐が主任で、その下に大尉二人、中尉三人、准尉二人のほか久保田理事官（少佐相当官）を筆頭に下士官上がりの軍属が多数いました。理事官は威張っていました。

師団動員室は将校命課（召集）と軍需工場の召集延期を担当し、兵隊の召集は連隊区司令部が担当していました。

軍需工場の召集延期は「甲」と「乙」に分かれ「甲」に指定されると無条件に召集延期になり、「乙」は部隊と相談して決めるそうです。あとの話ですが私の長兄は春日井の工廠に勤めていましたが「甲」に指定されたようで召集は来ませんでした。

連隊本部動員室の部隊編成の最初はラッパ手を受けた兵隊の名簿が特別にあり、いざ動員となるとラッ

相手の取り合いが大変だったそうです。それほどラッパ手は大事な任務なのです。

動員計画は東京の参謀本部で毎年度毎に動員計画を作り、各師団に配り、師団は各警察に配り、署長室の倉庫に密封されます。

動員下令となると師団は警察に開封を指示、警察は各市町村役場の兵事係を招集して交付、兵事係は各家庭に令状を送達する手順になっていて、所要三十分で役場に届いたそうです。

動員下令となると動員室の機密保持のため部外者の出入りは厳禁となります。ところがある時、名古屋憲兵隊長（中佐）が動員室に入ってきたので、室の鈴木大尉とものすごいケンカとなる事件が起きました。

早速、久保田理事官が東京の参謀本部に報告すると、一週間後にその憲兵隊長が師団長に転任の申告に來ましたが、南方軍出仕とのせいか実に悲壮な顔でした。動員室の力をまざまざと見せつけられました。私ら兵隊も身の回りに十分注意を払うよう注意されました。

この事件以来、憲兵隊の目が動員室の兵隊の動勢に厳しく向けられるようになったと思いました。

私は外出が割合と多かったので外出には必ず「名師参動、冨田」の胸札を付けていましたが、あの事件以後は「公用証」のほかに「外出許可証」を持参しました。

私が高家（春日井市）に寄るには「公用証」だけでは駄目なのです。「公用証」は衛戍地である名古屋市内に限られるからです。「外出許可証」が必要なわけです。この点を厳しく注意されました。

動員室の満期除隊を待つてすぐ徴用令または召集をかけ、師団動員室の軍属または下士官に採用する方法が採られていました。第六連隊動員室の中村兵長は前記の手順で除隊後二日目に召集され、すぐ伍長に任官、帯刀（本部は下士官は帯刀許可）を許されています。帯刀は憧れの的でした。

動員計画の中で塩漬けになっている例もありました。昭和四年徴集の現役の騎兵連隊に入隊し満期除隊

した。バリバリの兵隊は、終戦近くまで一度も召集されませんでした。

それは満州事変当時の騎兵は索敵用として使われましたが、時代の変化でそれは必要なくなり、守山の騎兵連隊の動員計画は開封されることなく、中身の赤色の召集令状は色あせていました。

最後には大垣地方で農耕勤務隊として召集され、年取った兵隊が鋤鎌を振ったという。この人達の受けた令状はどんなだったろう。

昭和十九年四月頃、名古屋第四十三師団がサイパンに行く時は、私と宮田の二人は指を切ってサイパン行きを頼んだのでした。が、久保田理事官から一喝されて断念しました。しかし原隊と一緒に行きたかったです。

第四十三師団は賀陽宮様が師団長でしたが斎藤義次中將が代わりました。経理部長が名古屋の人だったので、出征に当たり名古屋市内の物資が無くなるほど買い集め、サイパンに送りました。しかし船の輸送が間

に合わず、そのうち玉砕となり、下田の港に積み残された物が師団恤兵部の倉庫に送り返され、倉庫が満杯になりました。中は漁業に使う予定の投網や現地で栽培予定のカボチャの種もあつたそうです。

昭和十九年六月、サイパン玉砕後山下主任は参謀本部の参謀会議から帰ってから「日本は勝つ」とは全く言わず、「どうやって押し切るか」と呟いていました。本土決戦準備のため九州伊集院に新設した第四十軍第三〇三師団（高師三三七連隊）は人員だけ九州に送り、武器、弾薬、被服の一切は後送する「過送」という方法での編成でした。

軍靴が間に合わず応召時に履いてきた靴をそのまま履かせて行かせたという話です。

昭和十九年、中部軍司令部が大阪に、東海軍管区司令部が名古屋城内に新設されると、第三留守師団司令部は城を明け渡して市内千種区の城山八幡にある昭和塾堂に移転しました。それに伴って部隊から派遣された兵隊は通勤不可能となったので司令部に転属とな

り、宿舍が近くの愛知中学の三階に移動しました。

留守第三師団長は中山惇中将（陸大第三十三期）でした。参謀は浜松の日本楽器へ時々出張しては召集猶予の「甲」を十人くらい持ち帰りましたが、恐らく日本楽器の歓待を受けていたと思います。参謀のカバンの中を見たら『読後必焼』の朱印がある書類や本が入っていました。終戦後、書類焼却時には自分で焼いていました。

山下参謀は関東軍から来た人で、夫人は大連の医者の娘で子供が二人いました。戦局切迫してきたので大連に疎開させ荷物は後送しましたが届かないとの連絡があり、参謀が私に「富田、すまんが荷物がどうなっただか調べてくれないか」と頼まれ、早速調べたところ、笹島駅で空襲に遭い焼失していました。

参謀は警察電話で名古屋へ広島へ釜山経由で大連の奥さんに「おい！荷物は焼けたそうだが、そっちで何とかしろ！」とだけ言って電話を切りました。さすが軍人だなあと感心しました。

将校の召集は師団動員室の担当ですが、一年志願制の特進将校は階級は大尉で、中隊長に命課しても部下に陸士出のバリバリが居ては何をやっても間に合わず、本人も相当難儀したようです。学校の先生も短現の伍長になり、初めは召集免除でしたが、終戦間近には特典なしになって苦労したようです。

終戦の情報は入っていましたが、勅語を聞くまでは信じていませんでした。参謀は東京に上京するというので再会は期し難かろうとのこと、送別会をやるというので将校集会所になっていた東山会館から酒の四斗樽を持って来て室員全員で飲みました。

副官部の大熊大尉は陸大出のバリバリですが「オレは満州へ行って馬賊になるんだ。富田、オレの名刺を持って工廠から拳銃をもらってこい」と。私が大型拳銃二丁を持って来ると射撃練習をして気炎を上げていました。

終戦になってからは書類の焼却が大変でした。何しろ明治十年の西南の役の復員書類などが有りました。今あれば貴重な資料でしょうが……。それから現地人

宣撫用の映画フィルムが山のようにありました。

第十三部隊（輜重隊）から軍用トラックが五輛、三日間で矢田川堤防に運び焼却処分しましたが、前記のフィルムを炎の中に投げ込んだものだからものすごい火災になり、トラックが焼失寸前の大騒ぎになる一幕もありました。

私は十二月までいて帰りましたが、軍靴と黒皮の軍靴を土産に持ち帰りました。

私の養父は海軍兵で金鵒勲章をもらって年金恩給も一日一円もらっていたそうです。学校の校長が月給四十五円の頃の話ですから相当な額だったのです。養父から聞いた笑い話ですが、近所の娘で木村紫と言う女の子が、ある時「オジサン！　こんな令状が来たんだけど」と言って木村紫あての徴兵検査令状を持って来ました。兵事係が名前を早合点して男と認定したらしい。養父が憲兵隊に交渉したら若い憲兵伍長が納得せず「本人を出頭させよ」と頑張っているのです、翌日、金鵒勲章を着けて再び憲兵隊に行ったら全員気を付け敬礼で迎えた。若い伍長はすっかり恐縮してわびたと

のことです。

私は皆さんのような苦勞はしてませんが、珍しい所に勤務できて、知らない事も知る事が出来て良かったと思います。

昭和二十二年に結婚し洋服屋をやっています。